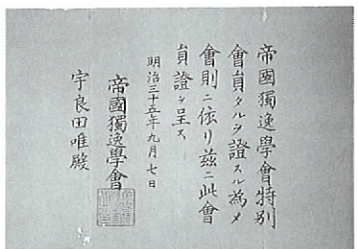




宇良田タダ子

幕末から明治にかけて、天草郡牛深町に宇良田玄彰という人がいた。宇良田家は銀主の家で、萬屋の屋号をもっていたが、玄彰は家業を弟の亮三にまかせて政治の世界に身を投じた。明治九年には熊本県公選民会の県会議員に当選し、西南の役に際しては、西郷と大久保の間を仲介しようとして奔走し

ている。その後も上京して中央の政治家に意見を具申したり、新聞を発行したりしていたが、同十六年頃帰県して紫雲新聞の主幹となったと伝える。タダ子はその玄彰の二女で、明治六年(一八七三)十月の生まれである。父玄彰に一番可愛がられたタダ子は、その父の性格を最も強く受け、自分がこ



ドイツ医学博士号証書

◆鈴木喬著(歴史家)

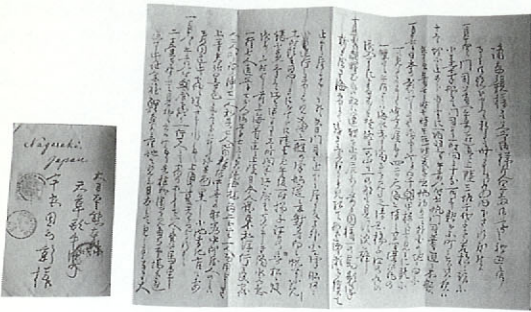
うと信じたことは断じて実行に移すという気概をもつに至った。十八歳のとき、牛深の大きな魚問屋の若主人との縁談が、本人の意志とは無関係にきまってしまった。大家同士のことで式の当日は夜遅くまで酒宴が続いたが、花嫁の姿が見えなくなり、部屋には置手紙があった。その中には「私はあなだが嫌いというわけではなく、女性のやらねばならない仕事があるから、このまま牛深に一生を埋れさせたくないのです。どうぞ許して頂きたい」と書いてあったという。タダ子はその足で、熊本市新細工町(現新町三丁目)の「毒消丸」と吉田松花堂に身を寄せた



のである。当主吉田順頌は近い親戚であった。

タダ子は、はじめ写真家になろうかとも考えたが、牛深地方に眼病で苦しむ人の多いことから、眼科医になってこれを救おうと思い立った。吉田家の手伝いをしながら熊本薬学校を卒業したが、正式の女医になるには医師の試験に合格しなければならず、そのためには専門の学校で学ばねば駄目だということが分かった。彼女は上京して、熊本出身の北里柴三郎が開設していた北里研究所に学ぶ決心をした。

入所中の学費は、吉田家が補助した。タダ子は、後に内科で有名になった内田博士や、癌の研究者として知られた宮川博士らと机を並べて勉強したが、



中国から父・玄彰にあてた手紙

その勉強振りは正に猛烈そのものであった。敷布団を縦に二つ折りにして横になるとそのまま起きて、また机に向かうという、文字通り寝食を忘れる有様であった。その甲斐あって医術開業試験を受けたときは前・後期ともに一年のうち合格した。明治三十五年、タダ子二十九歳のときのことである。医師の資格をとったので、実地研究のために東京市内や地方の病院の医局員として研修に努めたが、それだけではどうしても物足りない。まして彼女の専攻したい眼科学は、医学の本場ドイツ以外には研修の場所がなかった。意を決した彼女は、三十六年から二年間ドイツに留学し、ここでみっちり眼科学を学んだ。留学中に日露戦争がおこり、開戦の頃は日本人というので馬鹿にされたが、日本の勝利に終わった頃は皆が大変親切にしてくれたという。こうして三十八年、日本女性として初めての医学博士の称号を得て帰国した。彼女が長崎に上陸すると、各新聞が競って書き立て、迎えに出た見達と故郷牛深に帰ったときは、町中が幟を立てての大歓迎であった。が牛深で暫く休養したタダ子は、再び上京して、神

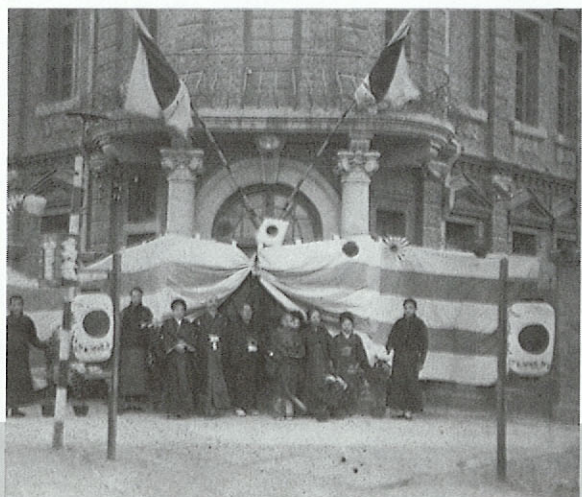
田佐伯町に宇良田眼科病院を開業した。ドイツ婦りの女性博士ということで、病院は押すな押すなの大繁昌であった。そのころ恩師北里柴三郎博士は、研究所勤務の薬剤師中村常三郎との結婚をすすめる、また大陸での医療活動の重要性を力説した。タダ子は恩師のすすめに従い、常三郎と結婚してともに大陸に渡り、天津に同仁病院という、当時としては珍らしい鉄筋コンクリート三階建の病院を建て、医業と薬局を経営した。

タダ子は現地の人々から慈母の如く慕われていたが、不幸にも昭和九年に夫常三郎が病歿し、そのうえ満州事変の余波で排日の空気が強くなったため、同仁病院は遂に閉鎖のやむなきに至った。開院以来二十二年を経た。彼女はその年のうちに生まれ故郷牛深に引揚げて、開業した。ここでも女医の珍らしさとその名声をたよって、島の内外から患者が殺到したが、彼女は貧しい人々には無料での投薬を行った。

翌十年の中頃になると、タダ子はまたもや牛深をあとにして上京し、大森区で眼科病院を開いた。しかしその期間は短かった。既に六十歳を超え、長い間の酷使によって彼女の体は蝕

まれ、かつての学友宮川博士の経営する病院に入院加療する身となった。だが、その手厚い看護も時既に遅く、肝臓癌のために昭和十一年六月十八日永眠した。葬儀は東京で行われ、吉岡弥生(東京女子医学校・至誠病院の創設者)をはじめ当代一流の婦人達が参列した。遺骨は島原の夫常三郎の傍に葬られたが、分骨を甥の彰人が持帰り、父玄彰の墓側に埋葬した。

彼女は若くして郷里を離れ、人生の大半を東京と中国で過したため、熊本ではその業績を知る人が少ない。しかし、彼女が不撓不屈の精神の持主で、女医としてもまた経営家としても成功し、我が国の女性の地位向上に大きな足跡を残したことは、疑う余地もない。



同仁病院の前にて